絆ーきずなー

設楽中学校PTA会長　小川義信

このたびの東日本大震災により被害を受けられた皆さまに謹んでお見舞い申し上げます。設楽中の生徒たちはすぐに募金活動をし、義援金を送るという対応の早さに感心しました。震災から四ヶ月が過ぎ、全国各地、世界中に復興や支援の和が広がっています。しかし、未だに避難所生活を強いられている人が大勢います。原発事故から避難した子どもがいじめにあったという悲しいニュースもありました。今、私たちは、朝起きて学校・会社へ行き、帰宅後食事をし、眠るという普通の生活が送っています。生活の基礎となる衣食住がすべて揃っていることに感謝し、他人のことを思いやる気持ち、人と人とが支えあうことの大切さを今一度考えてみたいと思います。

さて、今年度も三ヶ月が過ぎ、生徒たちは、夏の大会に向け、一所懸命取り組んでいると思います。勉学に励むことはもちろん、スポーツで心身共に鍛え、学校で地域で気持ちの良いあいさつができるように心掛けましょう。創立十一年目を迎え、再度原点に戻り、校訓である「自ら学ぶ・自ら鍛える・自ら律する」を心に留め、先輩から後輩へ設中魂をつなげていってほしいと思います。

震災から学ぶ「地域の学校」

校長　鈴木　修

三月十一日午後二時四十六分、東北地方太平洋沖地震が発生。それから四か月が過ぎる。連日、復旧のニュースが途絶えることはないが、なかなかほしい情報が手に入らない。しかし、インターネットを通して、わずかながらの情報をつなぐことができる。

入手したい情報の一つが、釜石市立大川小学校の被害とその後である。大川小学校では、全校児童百八名中七十四名、教員十三名中十名が死亡・行方不明となった。海岸から四㎞離れた学校まで押し寄せた津波は、六mを超えていた。豊橋港から豊橋市役所までの距離である。校庭に避難誘導した児童を点呼した後、保護者へ引き渡しができなかった児童を避難させている隊列に、津波が押し寄せた。地震発生から四十分後であった。

大川小学校校庭は、地域の避難場所でもあり、下校後の児童も再び運動場へ戻って来ていた。三角屋根の校舎に、屋上はなく、裏山は斜度四十度。山中には雪も残り、百人を避難させる難しさもあった。

想定外を想定することは、至難である。ただ、地域の学校として、災害訓練に限らず、日頃からの地域との連携や様々な問題解決の共同検討が重要であることに反省点は多い。

設楽中職員は、四月来「生かされていることに感謝して」というメッセージカードを首に掲げ、生徒の指導にあたっている。歴史に刻まれるこの大震災を生きた一人一人として、生徒と共に、強く優しく生きることを誓わずにはいられない。

願五風十雨

親ー二年のスタートにあたってー

広報委員長　原田宜典

毎年我が家にツバメがやって来ます。ある日一羽のヒナが外に押しやられて、「こいつは巣から落ちるな。」と感じました。その日の夕方、やはり落とされていました。ツバメは越冬するためフィリピンや台湾などへ遠い旅をします。だからそれに耐えられない弱い者は競争に負け、強い者が育っていくのでしょう。落ちたヒナはまだ元気だったので、巣の真下に簡易な巣を作ってやりました。親が落ちたヒナにエサをやることを期待して。二、三日が経過して、ヒナが糞をしているのに気付きました。「こいつはエサを食べているな。」と思い、しばらく少し離れた所から様子を見ていると、親ツバメが上から急降下し落ちたヒナにエサを与えました。「やっぱり親だね。」何か少し感動しました。ヒナも最近毛並みがしっかりしてきたので巣立ちの時期が近いと思います。

ところで、人間の子供ですが、私は「ゲームばっかりやっていないで勉強やれ。宿題は！プリントは！」それもどうなのでしょうか？言わなかったら自ら進んで勉強をするのでしょうか？前よりももっと勉強しなくなりそうで、それが恐しくて…。もし、ツバメの親と話すことができるなら聞いてみたいです。